学生による授業の枠をこえたデモンストレーション 発表会の試み：AcaDemoS 2007

AcaDemoS 2007 : A Meeting for Demonstrative Presentations by Students
Beyond Borders of Coursework

佐賀 聡人^{※1}
Sato SAGA

畑 中 雅 彦^{※1}
Masahiko HATANAKA

1. まえがき

2007年6月16日、室蘭工業大学情報工学科プレゼンテーションルームにおいて学生主体の学術的デモンストレーション発表会Academic Demonstration Stadium 2007 (AcaDemoS 2007, 主催：AcaDemoS 2007 実行委員会, 共催：室蘭工業大学情報工学科, 北海道教育大学岩見沢校, 開発技術研究会, 協賛：室蘭工業大学ものづくり基盤センター) が開催された。これは、学生のプレゼンテーション／コミュニケーション能力涵養のための活動の一つとして試行されたものである。本稿ではその実施概要について報告する。

2. 実施に至る経緯

室蘭工業大学情報工学科では、2003年度より、複数教員による多角的な学生指導の場「NPD懇話会」が継続的に実施されてきている。これは、教員および学部学生・院生を中心とする任意参加者(20～40名程度)が毎週集い、相互に登壇形式の学術的発表と質疑応答を行うものである。この懇話会が参加学生の質疑応答能力の向上にある程度効果的であることは既に報告した^{1), 2)}。しかし、懇話会形式では参加者集団が固定化される。また登壇形式の発表では参加学生の質問の機会が時間的に制約される。このため、NPD懇話会が必ずしも多くの学生に十分な質疑応答の機会を与えられるわけではなかった。

そこで、さらに多くの学生に充実した質疑応答体験をさせる機会を与える実験として企画されたのが AcaDemoSである。第1回のAcaDemoS 2006に引き続き、2007年度に実際されたのが今回報告するAcaDemoS 2007である。

3. AcaDemoSの趣旨と発表方法

3.1 趣旨

AcaDemoSは、通常の学術発表のように研究成果の

発表自体を目的とする場ではなく、学術的発表の技術と技を磨く場を提供することを旨とする。そこで、その趣旨を「日頃から勉強・研究で取組んだりあるいは興味をもって調べたりしている学術的テーマの魅力と真髄をデモンストレーション発表／ポスター発表を通じて如何にして第三者に伝えうるか、その技を競うことで、プレゼンテーション能力を高めるとともに自らの勉学の意義を再確認する。」と定めている。このため、発表テーマに関しては表1の条件で募ることとし、幅広い分野の幅広い学年層の学生が発表できるように特に配慮している。一方、評価に関しては、多様な学年層にわたる学生の多様な分野の発表を同一基準で比較するために表2に示す三つの観点、即ち「インプレッション」、「アイディア」、「テクニク」でのみで評価することとしている。ここで、各観点での評価を来場者の投票に委ね、その投票結果に基づいて表彰を行うことで、AcaDemoSは「多様な学生による多彩な学術発表が一堂に会する競い合い場」、即ちAcademic Demonstration Stadiumの雰囲気を出し出すことになる。

3.2 発表方法

各発表グループが、それぞれに割当てられた区画(ブース)に訪れる来場者を対象として、ポスターや実機を用いたデモンストレーション発表を行う。このため、各ブースには、主催者側で、ポスター掲示板1面(幅160cm, 高さ110cm)とデモンストレーション

表1 発表テーマの条件

(1) 学術的テーマであれば分野を問わない。
(2) 通常の学会発表とは異なり、テーマの新規性・有効性や発表内容の厳密性は必ずしも要求しない。
(3) 学術テーマの魅力や真髄をいかにして第三者に伝えうるか、その工夫に力点を置いた発表を望む。

表2 参加者投票の際の評価の観点

インプレッション	発表内容の面白さや結果の意外性
アイディア	発表テーマの切り口や着眼点の良さ
テクニク	発表テクニクの巧さ

平成20年5月2日受付

※1 室蘭工業大学情報工学科

図1 発表ブースのセットアップ例

用機1脚（幅180cm, 奥行き60cm, AC電源6口）を用意することとしている（図1参照）。また、それぞれの発表グループには事前にA4版2ページ以内の原稿を提出させ、それらを主催者側で予稿集として編集して来場者全員に無料配布することとしている。

4. AcaDemoS 2007実施状況

4.1 事前準備

AcaDemoS 2007は、前年度の AcaDemoS 2006と同様、基本的に3.で述べた趣旨と発表方法に基づいて実施された。ただし、AcaDemoS 2006が本学情報工学科主催で実施されたのに対し、AcaDemoS 2007では学科から独立した実行委員会が主催することとした。これは学科の枠をこえた学科外・学外の委員を主催者に加えることで発表の多様性をさらに拡大させることを目指したものである。また、今回の新たな試みとして学術的発表会としては異例といえる全ページがフルカラー印刷の予稿集（図2参照）を発行することとした。これは工学系のみならず芸術系の学生の参加も期待される中で、学生たちがより多様で自由な表現に挑戦することを促すためである。

実行委員会が中心となりWebサイトなどを利用して学内外に対して発表募集を行った結果、AcaDemoS 2007では全24件中の10件が当情報工学科外からの発表となり（前年のAcaDmoS 2006では全20件中で学科外からの発表は4件のみであった）、発表の多様化が促進される結果となった。その内訳は、当情報工学科内14件、学内他学科3件（電気電子工学科、応用化学科、機械システム工学科、各1件）、学内サークル関係2

図2 AcaDemoS 2007 予稿集

件、学外5件（北海道教育大学岩見沢校：4件、秋田公立美術工芸短期大学：1件）であった。発表は学生主体によるものがほとんどであった。また、研究室に所属している大学院生と4年生が共同で自分たちの研究テーマを一般向けに分かりやすく発表しようと工夫したものが多かった。その一方で、学部2年生や3年生が主体となった発表もそれぞれ7件あった。

4.2 発表当日

発表当日は、午前中にブースのセットアップが行われ、その後、以下のように発表会が実施された。

(1) 13:00 開会式

発表者全員が揃った中で、実行委員長から開会の辞が述べられ、実施に当たっての注意事項の確認が行われた。また、これと並行して来場者の受付も開始された。

(2) 13:15 発表開始

競いの場を連想させるジャンの音を合図に、一斉にデモンストレーション発表が開始された。それぞれのブースでは、開始早々から発表者と来場者との間で熱気に満ちたやりとりが行われた（図3参照）。その状況は絶え間なく訪れる来場者（総計200名余り）との間で発表終了まで続いた。この間、受付では随時訪れる来場者に予稿集と評価用投票用紙を配布し、評価結果を投票用紙に記入して投票するように呼びかけた。

(3) 15:30 発表終了

ジャンの音を合図に2時間余りにわたる発表が一斉に打ち切られた。発表の余韻が残る中、発表者は即座にブースを撤収し、主催者側は投票結果の集計を行った。

(4) 16:00 表彰・閉会式

来場者の投票結果（延べ投票総数588）に基づき表3のとおり最優秀賞3件と奨励賞2件が発表され、それぞれに賞状と副賞が授与された。

5. 結果

ポスター、ダイレクトメール、Webサイト、およ

図3 熱気に満ちた会場の様子

表3 投票に基づく表彰結果

最優秀賞（順不同）
○ 空中手書き図形入力インターフェース『BlueGrotto』は本当に実用化できるのか!?（情報系の学部4年生グループによる発表）
○ 書の芸術性（芸術系の学部1・2年生グループによる発表）
○ 複雑な気泡運動ダイナミクスの数値シミュレーション（化学系の大学院生グループによる発表）
奨励賞（順不同）
○ 情報棟がミニチュアに!? ～身長16メートルの巨人が見る世界～（情報系の学部2年生グループによる発表）
○ Blogを使ったコミュニティの構築～失敗例を通じた考察～（情報系の学部2年生による発表）

び新聞報道などを通じて広報した結果、当日の来場者は総計200名余りとなった。そのうち約半数は当情報工学科関係者であった。しかし、一方で、本学他学科の学生、北海道教育大学を主とする他大学の学生、および近郊の高校生をはじめとする一般市民の来場者もそれぞれ数十名あり、来場者の多様化が見られた。また当学科関係者のうち約50名は学部1・2年生の学生であった。このような学年・所属・立場の異なる多彩な人々を巻き込んだ質疑応答は、発表者・参加者の双方に刺激を与え、熱気に満ちたやりとりにつながった。

一方、発表に関しても通常の学会発表とは異なる多

彩な内容や手法のものが目立ち、それぞれのグループが独自の工夫で競いあってアピールしようとする姿が見られた。実際、研究室に所属する学生の専門性の高い発表に交じりながらも、学部1・2年生による発表にも好評を博するものがあり、その内の3件が賞を受賞した。また、最優秀賞となった得票上位3件は、それぞれ情報系、芸術系、化学系と異なる分野の発表であった。これは発表者・来場者ともに「発表の技を競う」というAcaDemoSの趣旨をよく理解した上で発表会に参加していた結果といえる。

なおAcaDemoS 2007の様子は授業の枠をこえたユニークな発表会として地元新聞社2社によって延べ3回にわたって北海道内の市民に紹介された。

6. おわりに

2回のAcaDemoSの実施を通じて見られた参加学生たちの充実感に満ちた表情などから、関係者の間では予想以上の手ごたえを感じたとの声が多い。しかし、AcaDemoSそのものの今後の定期的な開催の可能性については未だ不透明な状態にある。AcaDemoSは、教員・学生の有志による授業の枠をこえた教育・学習の実験の場として実施されてきた。それゆえ、何らかの新たな実験的な試みが企画されないかぎり、次回実施に向けての強い動機付けがなされず、今の形のままで毎年の継続実施は必ずしも容易ではない。一方、AcaDemoSを正規のカリキュラムの枠内に取り込んで定期的に実施することも実施規模が大きくなり過ぎることから困難であると考えられる。

一方で、AcaDemoSの実施により得られた対話型発表会実施のノウハウに関していえば、その一部が本学情報工学専攻の授業で毎年2回定期的に実施される「修士論文中間発表会」で活かされるようになってきている。今後は、AcaDemoS等の授業枠外の教育実験を試みつつも、その知見を正規カリキュラムの授業に活かしてゆく工夫がさらに求められる。特に、学年をこえた学生間の相互作用を促すような授業実施形態の実現は、高学年・低学年双方の学生の能力涵養と意識向上に大きく寄与するものと考えている。

謝 辞

AcaDemoS 2007は、室蘭工業大学による「平成19年度教育方法等改善経費」の支援により実施された。

参 考 文 献

- 1) 佐賀聡人：複数教員の多角的な指導による学生懇話会の試み，開発技報，47，pp.37-42，2004
- 2) 畑中雅彦，渡部 修，本田 泰，佐賀聡人，施建明：複数教員の多角的な指導による学生懇話会の試み（第2報），開発技報，48，pp.49-56，2005